広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	英語前置詞withの共時的研究 : 英語前置詞の意義素試論
Author(s)	吉城, 聖顕
Citation	ニダバ , 6 : 56 - 56
Issue Date	1977-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00050978
Right	
Relation	

英語前置詞 with の共時的研究

――― 英語前置詞の意義素試論 ―――

吉　城　聖　顕

英文を読み書きする際に厄介なものに前置詞がある。辞書をひもとくと，例ば，O.E.D. では40項目の説明が加えてある。然し，日常生活において，本国人がこれだけ多様な意味・用法を意識し，考えながら用いているとは到底考えられないことであり，当然本国人は，社会習慣的に繰り返し現われる特徴を捕らえて用いていると解される。そこで，前置詞全体のそういった特徴を考察する一過程として前置詞 with を扱う。この考え方に立脚して考察する場合，文脈の影響を排除し，より抽象的な意味単位を考え，その抽象の束を単語と考える服部博士の意義素論が最も適していると考えられるのでこの理論を基にして with の考察をする。服部博士は意義素を以下のように定義する。

> 文や単語（形式）の意味は，このように抽象的なものであるから，発話の具体的な「意味」と区別して，文の「意義」，単語の「意義素」と呼ぶこととする。（「意味に関する一考察」§ 3.4 ）

この理論を用いての意味分析は，変形文法でいう深層構造にあると考えられるものを直接の素材としている。従って，発表の際質問のでた hypallage 変形の表現，例えば，i) I hung pictures on the wall. ii) I hung the wall with pictures. では，ii) は i) の変形で生じたものであると考え O.E.D. では ii) を手段に分類しているが，私の分析では排除すべきと考え，発表では扱わなかった。

以上の分析を通し，前置詞 with の意義素は《随伴》でよいのではないかと結論した。

資料は，F.T.Wood: English Prepositional Idioms. (Macmillan, 1967).
Jaws, Jonathan Livingston Leagull, Love Story, Time, News Week を用いた。